

特集 ■ メタボリックシンドローム

「死の四重奏」, 「シンドローム X」, 「インスリン抵抗性症候群」などと呼ばれてきた病態が, 世界的にメタボリックシンドロームと呼称されるようになり, 現代人の食習慣, 生活習慣に基づく病態として各方面から注目されています。リハビリテーションの観点からのアプローチも重要と思われ, 今回, 特集として取り上げることとしました。この分野の第一線で活躍されている方々が, 概念から, 診断, 治療, 将来展望に至るまで詳細に解説されていますので, 読者の方々は本シンドロームに関する最新の情報を入手できることと思います。

概念 (河合俊英氏ら, 643 頁)

わが国における動脈硬化性疾患による死因は全体の 30% を占めるまでになっているが, 肥満, 高血圧などが集積するマルチプルリスクファクター症候群が, 動脈硬化性疾患のハイリスクな状態であることが明らかになってきた。世界的にこれを「メタボリックシンドローム」という疾患概念として扱うことが提唱され定着してきているが, 本稿では, その呼称の由来と定義, 病態生理などが解説されている。

診断 (岸田 堅氏ら, 649 頁)

日本では 40 歳以上の成人のうちメタボリックシンドロームに該当する者が 940 万人, さらにその予備軍が 1,020 万人いることが知られている。厚生労働省は 2008 年よりその検診と保健指導を義務づけるとしているが, 本稿では諸外国の診断基準と比較しながら, わが国における診断基準が概説されている。

治療—食事療法; 低栄養の食事療法から過栄養の食事療法に (宮崎 滋氏, 655 頁)

肥満症治療ガイドライン 2006 において, メタボリックシンドロームに対する治療方針が提案されている。食事療法としては, エネルギー制限, 減量, 指導, 生活習慣の改善が重要である。

治療—運動療法 (大田哲生氏ら, 661 頁)

脂質代謝や糖代謝に対する運動の影響, 血圧と運動という観点から言及がなされ, メタボリックシンドロームと関係の深い心血管性心疾患と運動という側面からも運動療法が解説されている。

治療—薬物療法, 行動療法 (吉松博信氏, 669 頁)

メタボリックシンドロームの治療の基本は食事療法と運動療法であるが, 患者は治療の必要性を理解しているものの, 実行と継続が難しい。その際に知識を行動に移す行動療法が大切となり, さらに患者によっては薬物療法の併用を考慮する必要が指摘されている。

予防と将来展望 (上月正博氏, 679 頁)

リハビリテーション医学の視点から, メタボリックシンドロームに関する予防と将来展望が概説されている。障害者はメタボリックシンドロームに罹患しやすく, したがってメタボリックシンドロームは包括的リハビリテーションの対象疾患と考えられる。腹囲の基準に達していなければ絶対に安心というわけではなく, 運動療法と食事療法はますます重要になると考えられる。